鏡頌

東京都立中央図書館

風狂文艸巻之五目録

一 好物論
一 獨樂論
一 梅干頌
一 大黒頌
一 鏡頌
一 毛抜頌
一 臍頌

一 欄王樹頌
一 人丸繪讃
一 小町衰老繪讃
一 富士畫讃
一 神農像讃
一 琉球芋讃

風狂文艸巻之五目録 終

風狂文艸巻之五

○論類

好物論

蓼は辛きもの成に虫あり。蓼は臭くれども夢食ふする虫あり。傾飩にかりて蓼菱を斜用するも。傾飩は悪あんて蓼菱に仇あるよりて。性の偏多不よりいづれも好不好の二條に別き侍れ。好者は好を。魏徵は磯芹を耳をかくるかと云で臭くて。劉邑が蕎麦の吸物を好を。叔明が臭虫の付炙を好しい殊

東京堂蔵書

に美を好物なり。又好物にまぎるゝものを偉とゝ。王羲之ぶ鵝を好こ。米元章ぶ石を好しゝ。ちの偉の中なるべし。

たゞ丘明にたゞ偉の偉あるべ。人丸は妹とゝ偉あり。ゆゝ衣い未揚の偉みて。あれいこゞい清女ぶ偉なり。ちゝば好と偉との境を何をもつて別こん。ぶ好を性氣の偉こゝて偉を習にあるべし。倍ゝ偉ふなるとゝを習の好色を咎むゝ行ふゝなり。性相近しゝ人は相色しゝも行れが。習を性氣の偉を療治すべきと加減もあるべし。我ふゝゆゝ世義法の道と学へしゝゝ。好物の偉を天然にあまりせこゝ言葉ぶゝおしゝゝ。ものゝ花ゝ夏の色。秋の月にそれ者か。世事ゝくの堅ゝて凡雅好の腊部あゞ。花を好く好人をもにせゝ者しゝ月をゝく好人に者のあるのをゝ女で美歌せぬ人をあゝみ。色を好て純淡のゝをいゝ。月を好く酒を脱く用心に遠ゝをゝ色して法を宿ゝあゝなゝば。凡雅の好を偉に法をて其強ゝ。哭吁世に金銀財寶を好人を一般ゝて。者にはゝくてゝを好釈ゝ者を好法手に信を好人のゝ紀ゝそのゝ。ゝゝそれ人の道を好て。凡雅好ゝる人あゝば。ちゝの偉に害みゝんあゝるべし。

獨樂論

宗匠として猫楽む簪乃かゝ面に。賞のちゝくと友を呼。
夫のらゝくと味れ芸を賞さん。脱ゝて芸中世界の
心地せあ。行嗽乃もとに世乃味とうて。鶏乃
けを放ずゝ人。鶏裏れ乾坤とゝいれば猫楽の美
境ゝにあゝど。猫楽とハ何ぞや。友を絶世乃交接を
やめて楽むをゝみや。肢食我身に遠ゝ事をゝみや。強
らゝど。友を絶世乃交接を事ゝ。貴ゝ清高ゝ事ゝ
楽むハ小原胡坂の見ゝなゝべし。衣脱に錦をかぶりく

襦襪乃中に寝ゝ。食ハ豚を焼ゝ鶏水組ゝ
踊ゝ。ハ張三李四乃楽乃楽む事なり。大原ハ市にかくれ
て猫楽むべきゝに楽ゝて。友をゝゝ世乃交接を捨
ゝ猫楽むにゝあゝど。猫とハ人がゝて友れゝ猫の澤山が
ゝまをゝみだゝゝ宝蔵ての小舎山に紀藤りあゝ
ハ。老を書ハ猫楽乃時吸ゝ。凡雑乃さびに付代ものれ
百人首を枕ゝて。清山白雲の楽境ゝとゝれ。長
明が日野ゝ山乃方丈に。家人の言なゝいを紀をつゝ
ゝハ思ゝまゝ。り由り生乃紀外雑にゝ悔ゝ残ゝん。
司馬法云乃猫楽寵ハ猫楽む生境を好てゝゝハ名

付あしぬ。偽保とてんに天性あらば。彩ども霊ろ。所
たく。山まもども拒ろく所彩。市中ろ叫ましき中
にも。惠雖彩遠ろ街にも。往うて獨楽ろ境ふあ
ぞとつふ事彩。

○頌類

梅干頌

玉仁雖波ほろ玉を鈍しーより。菱神宰府の奇跡
を遠し。宗任古てろ玉を云れば。京香生西ろ花り
婦ろ。義経い墨して禁じ。直幹い常の宿を出ろ。

去ろれども。ぐみ。蕊より頃造ろ姿をのく称して。其実
をうてうす人に美しろれ。其ふい豊後を甲として肥前
ろ。ふふしてい金柑の稽に入ものあり。大ろてい密柑
をあぶむ。緑の色ふ色ふあるい。楽紙ろ色に淡ぐ。淡
ぐれるサの色ろ人ふい青ろ。珊瑚珠にれられば。
周庚信い紅瓊といいろる。白皓ろ雪ふ須ていい。酢を吐て
生得ろ。ぐ。ぐ紙弱し。紫蘇ふゆろろ色淡ーく。朱
に紫ろ名猿を擇れば。そもろあろ一眼ろ色秀ろ
よぐむ。恵祖にそ。梅ほろ実を恵てわり。其名を文
てこ軍の間ぐろろ。徒麿い水銀ろ玉を集む。淡

にゆはの汁を飲せば。黄薑に附て一日に粥を半ぱぐらあんて。鱗を取て肉を焼て後に壺の中小雨に拓して煮ぐふ老を書いあげ。黄芪に粥じ出く給ふと前をうぐべきを。又ある時に筆の林をうぐひ。草の笠をさぐり。鶏の中を道遥とれば徒毒あ人毒犯を半れ。彩玉の丹を白る朝にを黄菜に浩させ大福とうて。祝紙の一毒弱をる寸。菜を百草に点証して一年の穢恵を寝ひ。梅の百花の斟して年中の疫病を退治に。ぐ花を仲去に数どをるの日毒に紛へらを。苓ちを例にを。梅干親又と云

梅干嬰と称して相生の松竹よ楽ぐせ。悦昆布歩鮑を友として三方三嵩よ天地を旁よ。よく氣を清くし新氣仙遥神明の富を掃除する徒ある物をいろたれば苔より神の供物にせざるぞや。秋あ中して梅干ふ乃あれば。指くてを。情氣を吐出。清め給へ給へ。

大黒頌

大黒く。大黒とて神を。一に侵を始まへてみ〳〵ろの苗代ろ。粒百倍の稲よ稲をひとゝび。秋の田を刈とる

四方より屠うをとり。二にあつまりて生を平らかに
代を楽しむ。所てそこに記しくるで百代を。祝しの水と安
かるに。之小酒を作りて老若の中をも弱冠など。愛を共人て
祝ひにはぎうけ。み秋系朝ごろ変更に山はれ。男女世
の中よりに安らかんとの神記作り録し作らん。あつ毎
のごとくして。ふつを病日苦天ならば。風醫者を写さず。毎
出民を注さば。さればちんの事形。八の歩舗を廣む
れも八陌の外まで賑はにすもぬ験して民の竈繁し。九
つ小差の粒くに五世で建ぎき。十で的ど活と用生
ふを大系。

鏡頌

不恋の年を越て。ふ別の実をむとぶ男あり。高をが
後ふの方をそこに出く我もいざとて立よれば我をぬ
我あり。我法よ二人とうの。我を彼とせんの。彼を我とせ
んの。我去れば彼を出まれば。将ごと追人ど。我ふ〳〵く彼
を結し。ちづく我彼て相見ざる年十年後。ふたび相
ふまば。彼法の義さしてさわ紀和をとふ〳〵ひ義清
ぐ紀寄のごぎきを恨を氣色あり。我彼が老るを
悔わば。我よりふ法ふに界ごろを。特を初てかぞへば。

実も十分年乃喜状をもく。清ゆ清者といく。
牧干仲乃ゆ引へらも。其下筆を求むもしもくやう
粘字名跡のとり方。血氣乃いたりて牧に書てば表れ
行年の墨を磨ぜ水銀も形〳〵やとして。古金にかりくる紙
ちくりに筋く。彼が曰。人を人を捉として足拓若無の
欄を正法。腦中乃一田筆に墨を磨べし。月こう
巷を形へべし。水銀の玉ちりゆ筆染ゆ結ゆ家乃外
を紙ぜば。云事の花見に用も須ぐ。つづくにる凡雅の情紙
うゝしてむ。

大ぐゝ乃月に宿る在天下一

毛抜頌

さも似くゝ名。干深に映雪と蛤乃わんぐりとに
冥そて。行の待所ありて去りあるん。毛抜をゆゝやあ紙
べし。腰に琴ゝを弦ては更ゆ強し。虎の牙ゝく強
乃舌形。こぐ喰付ば放ちもやゝ。髭むせるゆとぐい乃
ちりをうゝぐし。苦むせる蟹乃あくりを遺遠と。一雨
一用其用くゝ。莉を抜捨紙猛力あゝて絶級のあとゝ
を收也。美女に近くる鼻毛も其役をしば辞せず。老
人乃法もゝ。右人紙乃絶補美徳まで。美役のいきゝ

そのとくあらはれたり。されば人〻の腰に八十のつぼを弘
其なし姿の。蛸を喰ひ蚕豆を嗤こすめ。其肉のか
たまり鉄のごとし。これも鉄なり南方より生ず。

臍頌

かの袋の針をぬかり細かにして。臍の百会より足の至陰
まで皮肉の縫よせの腑とは。医者は神闕と経絡め
ぐ臍なる和国の鞆さぎなり。天地開闢より諸役御免
にして何のいとなみもなし。漢と漢とのそのまとより
見もなければ。わざわざなる色に心を動し。切なるさいに臨

せらぬ慾ひもなし。鼻なければかの匂ひに涼しき。栢
香をうらやむ情もなし。耳なければ穢も好もなし。足
なきものは千里の労なし。夏は納涼の夕扇子もちに
おそるゝ暑を忘れ。冬は寒気の綿入ふとんもほしく
寒さをしらねど。喰ざれば肌る事なし。飲ざれば渇せる
事なし。怒るを笑ふを憂に喜ぶ。次南華の老人も
樹下の翁も。斯境界に身を寓事は難かるべし。鍋釜
の臍は同じく小焼かれ。殊に水を月の苦しいうまなからん。
石臼の臍は常に引まはされ。追まはされ身の痩るを見
へば。麝香も臍を奪はるゝ事起し。麻糸の臍をおさされ

作れる花のあど物乃新たりぞ遠勝てこそ安楽なれ。
くぐ雷をのゝ一生の気ぼそくして用ゐに若む雨も
あれがりや雷を地にひしゝ地震を家人上くゝ
け信者乃形ひたるべし。

欄王樹頌

梅桜の花を凌せれ。茅麦を実を煮せる花
実あるものをもてべし。ホ山の木の紫さんぱ色に色
はてい紅葉ともて形にふるとする詠まをあがり
付れ。茲に欄王樹わどおりき物をあゝ。其状へ鯨の

のごとく鞦韆する絲瓜にを似ぬ。さらさつぎいろへろ
りとびゐさん哭し。樹の形にを入ゐ株乃用ふさ嵩
らず。まとそんば凡よそよて拓をもゆだ。花とそれ
ばやはの色たく。葉とそんが紅紫せどゝ花実枝紫の
ホを出くあも枝とそれ人にも点。葉と四人ホ
も茲仕蕊とて止ぬべし。ちれども山蓑麿り紅
くる用角あれがるわ足世ちりにゆとあるハ形ひつる
緑濃り明者を点をそれもさびし氣也。自立すれ
ば凡小脱くれを蕊ホ好り赤焉帽るそこら色ち
をそふたるべし。欄王乃ゐを入ゐ。奇絶哉

文の墨より得しらやぶうらしぐへてを用東に
家人のごく。字治川の泡と消し。一末法師澤水
を絞までの戸の石塔しも又人作り事。
欄王樹のわ〳〵の枝や三四月

○讃類

人丸繪讃

姓氏はしらしれぬ。〳〵うるはしのを一方業に称りく。
口号の言の葉を千古に牡歩して立ての歌仙にも
身一にあつまり。足引の山鳥の尾ながく世ノこり

朽せど。今を盛明の浦にいまさりの歌仙に云
朝ぼらけやゐを世の中に沿かくれ

小町衰老像讃

花の色をうつりにけるいたづらに。雨降ながめ
行末ごとにかとる人。孫せ〳〵まに猿ひ蓋こ。父母に後れ
兄弟を先ぶ。老行先のよくるに百しをの身を。
うき業の枝に人くさ。さそふあらば
嫁入せんとてこそ。蕣れごとり
蓋もんとなりよ

富士畫讃

面行にふくゐつくゝ。文字乃ちとんがれの風まとび
く煙乃行末をたゝばとかこち。探美にいく賞ぜ
ゝく。筆勢生動乃雲霧にあぐむを三回一みゝ一ゑみ
二ちゝざる故なるべし。されば不二ともいふなり。赤人
の四季乃酒をひとゝびゑみ氣色をゝし。茶平かのこ
まぐゝ乃一絵に風情をわびぬ。はちゝぬゑい富士乃根
いろゝてを

香乃中に庵る法ぐゝの小袖哉く

神農像讃

侍を立るがれか富士女ちかれ

百草を嘗て醫道始む。一日に七十乃毒りあ
ゝり給へども。食傷乃沙汰なる明醫の
大祖とぞ。ゝ。ゝて曰

長羽織根元美哉
味論興物棒氣味
君不知庸醫能毒
仰御影匙取斯所

芋諸讃

南人不図より伝へく孤孜にうをよりて孤孜芋とよ
ん。中村行ゞ一塊を手に送り来る。煨して食と其耳
美なる事ゝ斗なし。一日乃飢を充れ侍る。幸茅ゝ其
功能を挙ゝ其寿延命の物とすよりて一章を儆し
て中村氏ゝ附と。其儆に曰

芋よ　芋よ

海上に出れしかの人ども其産土をもとめる
ゝ。実ゝ図をもとめしかやうん。幸く孤孜ゝ落

ニアにゝる。鄙乃住居をもとめくてゆ九州乃都にも。あ
てるや雑徒の市にをあそび。今を日本凡ゝ化せ
しゝるもめでゝ。其状を姫まる豚のごゝ。ご性乃
若ゝを実に。弱に似ゝる。父母を食ゝ不者ゝの
にあゝず。肥ゝる事ハ肥ゝる。布袋乃姿あゝて小児
も抑く。抑ゝ者ハ墨とよべゝ。ゝよゝ地勝に笑ゝ
人をあゝるもの。姫にゝてあゝゝ作れ人恵ゝ。
天味を徒にゝるゝ。ゝ一生乃芋をいん。食ゝて
佳境に入ゝいゝ顧凱之のゝ徒をゝ作ゝ。心永く
後世乃易牙を待ゝるまゝ。あゝ八孫乃上に

上戸ぞ酒くらんすべしすし。
麁ぞうそ麁糟り
かうら孩玖いも

風狂文艸巻之五　大尾

寶暦二戌申冬再校

江戸日本橋南壹丁目
須原茂兵衛

大坂心齊橋安堂寺町
大野木市兵衛

書林